共に考えるということ

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　冨山一郎（火曜会）

　皆さんようこそいらっしゃいました。これから二日間多くの言葉を交わしていきたいと思います。これから話すことは、そのためのウォーミングアップです。この集まりはいわゆる学界のような研究発表の場ではありません。個別のテーマにかかわる学界動向や評価などが問題ではありません。重要なのは、言葉を交わしていくということであり、最初の私の話しは、そのためのステージを準備するということです。

最初のウォーミングアップとしては話したいことは、この共に議論をするということについてです。これから話すことは、既に当たり前のことかもしれません。また私にとってこうしたことを考え始めたのが、スユノモにであったからであり、そのメンバーの人々にとっては、あたりまえのことかもしれません。ただ議論ということが正しさの競い合いや、結論に対して優劣をつけることだということが身についてしまっている私たちにとって、やはり「共に考えるということ」がどういうことなのか、確認にしておきたいと思いました。

また同時に、私にとってこの集まりは、2月に私がスユノモで連続講座をしたことの延長線上にあります。その時の最後のあいさつの際に、連続講座は自分にとって大きな節目になると言いました。それは研究あるいは議論をするということにかかわって以前から考えていたこと、感じていたことを、改めてこれから前面に押し出していきたいということでもありました。今日の話にはその出発点の確認という意味も、私にあります。

誤字がかなりあり、また注は不十分ですが文章を一応書きました。すぐ読めますので読んでください。小難しく書いてしまっているのですが、いいたいことはシンプルです。また先ほど述べたように、人によっては当たり前のことだろうと思います。今日はこれから原稿を読み上げるのではなく、この文章の背景などを織り交ぜながら、注釈を加える形で話をしたいと思います。

2月でのスユノモの講座の際こだわったのは、話せない、あるいは言葉にできないということに、一般的な言葉の外部ということだけではなく、話しているのに言葉とはみなされないことという問題を重ねて考えるということでした。何を発言とみなし、何を表現とみなし、何を言葉を発しているとみなすのかということは、極めて制度的な問題であり、言葉という秩序におけるいわば境界を決定することにかかわっています。

それは言葉において秩序を担う境界であり、それは同時に言葉が必要のない暴力が浮上する縁でもあるのです。2月にはこの言葉が消え、問答無用の暴力が浮上する境界を尋問という問題として議論しました。

　すなわち言葉の外部という一般的な設定を、話しているのに話しているとはみなされない状況として考えるということです。こうした事態は、さまざまな場面において存在します。普通それは話すということの前提かもしれません。また話を聞いて何らかの評価を下すということの土台自身にかかわることであり、同時それは、ある発話は聴く必要がなく、問答無用でその空間から放逐可能であるということとも関係します。またその境界をつかさどる尋問もいろいろ場に存在することが分かります。

それは、いま世界に蔓延する路上に戦車が常駐する戒厳状態かもしれません。あるいはそれは、ファノンがいうような何を説明しても、「他者は身ぶりや態度や眼差しで私を着色する」ような植民地状況かもしれません。あるいはそれは、「沖縄語ヲ以テ談話シアル者ハ間諜トミナシ処分ス」とされる戦場かもしれない。そこでは発話は言葉の内容ではなくスパイの身ぶりとしてのみ了解されます。あるいはそれは、関東大震災の際に登場した「おい、貴様、ジュウゴエンゴジツセンといって見ろ！」（壺井繁治「十五円五十銭」『戦旗』1928年9月号）という尋問の場面かもしれない。そこでは言葉は、殺してもいい暴徒であることを示す動作となります。あるいはそれは、何をいっても、病状としてのみききとられる精神疾患の患者の日常かもしれない。

　またそれは同時に、饒舌な言葉の世界でもあります。あるラインを越えない限り、饒舌に語りうる世界、それぞれの領分の中では自由に話ができる世界。それは区分された均質な言葉たちの世界でもあるでしょう。この均質な言葉の饒舌さには、問答無用の暴力が支配する領域が常に既に存在しているのです。つまり問題は言葉の前提の外におかれるということです。そして外におかれるかもしれないということを感知ことは、既に待機している問答無用の暴力を予感することでもあるでしょう。それはファノンの記述が示すように、ある種の身体的な応答だともいえます。

　では話すには前提を受け入れるしかないのでしょうか。あるいは言葉がラインをはみ出さないように饒舌に語るしかないのでしょうか。しかしこの饒舌さにはいつ間違われるか、いつ尋問に合うかというおびえが隠されてはいないでしょうか。そこには臆病者の身体が存在するのではないでしょうか。

こうした臆病者を巻き込みながら、別の言葉の始まりがあります。話すか話さないかという決断を迫るのではなく、外に放逐した領域と言葉との関係を新たにつくりあげていくプロセスが、重要なのではないでしょうか。またこのプロセスには、書くということも、またさらにファノンが記述したような身体的な身構えも入ります。そしてこのプロセスを確認したいというのが今日の話の中心です。

この新たな関係を作り上げていくプロセスということについて少し説明をします。それは、言葉にできないということを言葉で説明する研究者の傲慢さがかかわっています。言語の外部を言語で説明する気持ち悪さ。無意識を設定して見事に説明を加える研究者の傲慢さ。そこにはいかに正しく説明できるかをめぐって争うくだらなさもあります。それだけではありません。こうした説明の高慢さを批判することが、理論的という言葉において一挙なされる時、そこには別の傲慢さも登場します。理屈ではない現場を私は知っているというわけです。そこに運動ということばをいれてもいいかもしれません。

そしてどちらも共通しているのは「言葉の外部を私は知っている」ことです。その知は、尋問者の知識と極めて似ています。またそこに浮き上がるのは、理論であれ現場であれ、その知っていることをめぐってどちらが正しいかを争う風景であり、何が価値ある研究かの序列を争う姿です。

もしこのような風景や姿が議論ということなら、その議論において言葉の外部におかれた領域と言葉の新たな関係をつくりあげていくプロセスは、中断され続けることになるでしょう。共に考えるということで問題にしたいのは、このような中断させる議論ではない議論というものを確認したいのです。

またこの間違われないように脅えながら饒舌に語る言葉の秩序こそが、既存社会の集団を形作り、社会を語る範疇を作り上げている類的な同一性をであり、李珍景さんのいう「存在者」なのではないでしょうか。したがってこの新たな関係を作り上げていくプロセスは「存在者」から離脱し別の存在になるというプロセスにかかわっているのであり、存在にかかわる言葉の在処にかかわることでもあると思います。そしてこの存在にかかわる言葉の在処は、饒舌な言葉の停止であり問答無用の暴力がせり上がってくる事態でもあるのです。したがってこのプロセスは、尋問が支配する戒厳状態においても言葉を手放さないことでもあり、饒舌な言葉に満たされた世界においては言葉とはみなされない領域から、言葉が始まるプロセスを確保することです。動詞的思考とはこの確保する作業のことです。

類的同一性の中にいる存在者から別ものが動き出す。その別物を「存在」とよんだ李珍景さんが重視したのは、巻き込まれることであり、出会いでした。その出会いという出来事からはじまる「思惟の言語」こそが、不穏なるものたちの存在論です。ここに他者との関係性という問いを重ねてみたいと思います。

すなわち言葉とは、「他人に対して存在することで」であり、このような言葉の在処こそ、今日話をする議論ということを根本的に成り立たせていると思うのです。いわば言葉とは言語学的範疇というより、自分を他者に対して縁取ることであり、それは書くということにおいても同じです。言葉とは「私でない存在に出会う」ことなのです。そこでは、正しい意見を伝達したり啓蒙したり、正しさの一致をめざすことでもなく、「他人に対して存在すること」が重要であり、関係性が不断に生み出されるということこそが要点なのではないでしょうか。

いいかえれば聴く、読むという行為は、こうして縁取られた存在を類的な存在に区分けすることなく、聴くことであり、読むことではないでしょうか。語ること、書くことに対して、何を言葉とみなし何をみなさないのかという区分けするのではなく、それが「私でない存在と出会う」潜在的な可能性に満ちた行為であるということが重要なのではないでしょうか。このような新たな関係が不断に生まれていく実践こそが議論ということであり、共に考えるということであり、動詞的思考ということだと考えています。

書いた文章ではこのことを考えるために、饒舌な言葉の氾濫の中で言葉が停止していく1930年代の日本社会におけるある議論をとりあげました。それは中井正一の1936年に書かれた「委員会の論理」と題されたものです。この文章はいろんな人が言及しているのですが、先日亡くなった鶴見俊輔さんが極めて的確な要約をしています。すなわち、知識と社会の関係は、正しさすなわち論理でむすばれているのではなく、議論において結ばれているのだというわけです。

知識は真実や正しさの啓蒙において社会にかかわるのではなく、議論において初めて社会とかかわる、鶴見さんにとってこれが中井がいおうとしたことであり、したがって何を話すのかということよりも、いや少なくともそれだけではなく、いかなる議論を作り上げるのかということが、何よりも重要だというわけです。いわば話す、書く、聴く、読むに含まれる「私でない存在と出会う」潜在的な可能性こそが、社会との関わりなのです。

またこの中井の文章は、公的な言論空間が既に存在しないということを前提にしており、問答無用の暴力が社会にせり上がりそれが秩序を担うという状況の中で、いわば尋問が社会を担いはじめる中で、いかにして言葉の在処を生み出し、言葉を再開するのかという問いの中で書かれたものです。

この時代感覚は、私には今の状況と重なります。正しいことを唱えれば社会が変わるという知識と社会の一直線の関係に、のめり込む一方でそのような機能的関係を保証する場は既にないのではないか。社会を変える必要がないといっているのではありません。ただ私が尋問ということから議論を始めなければならないと思ったのは、乱暴にいえば中井と同じ言葉への感覚を持ったからです。問われているのは知識それ自体の前提であり、言葉それ自体の前提ではないのかということです。中井の言葉を引用すれば、「集団は新たな言葉の姿を求めている」のです。

中井に戻ると、中井は思惟すなわち考えることとそれを話すこと、あるいは書くということの間、すなわち思惟と言葉の間にこだわっています。一般的にはそれは、知識人による思惟の伝播あるいは啓蒙として理解されるかもしれませんが、彼は、そこに思惟から「問い」へという転換を見ます。思惟を開かれた問いにすることが言葉にするということだという訳です。

また思惟を確信とし、言葉にすることを主張と述べています。本当にごつごつした言葉が彼のこの文章では登場しますが、思惟において確信したことを言葉において主張することは、その確信がまだ見ぬ他者に対して曝され、問いへと変わることであり、ある種の外部性あるいは否定性を抱え込むことなのだというわけです。そしてまさしくこの問いにおいて、中井は討議という言葉を用い、さらにそれを審議性という言葉で表現しています。この審議性こそ彼のいう委員会なのです。

本当にかたい言葉が並びます。それにおののかずにいえば、言葉にするということを、自分という存在がまだ見ぬ他者に曝され、自分の言葉が新たな関係性を生み出す問いとしてどこまでも確保され続けることであり、そうしたことがこの審議性という言葉にこめられているのです。

それはある意味で当たり前のことなのかもしれません。その上で私は、この審議性において「共に考えるということ」を考えたいと思っています。またそれが、語っているとはみなされない領域、語ってもそれが内容ではなく動作として問題無用の暴力に曝される領域と言葉との関係を作り上げていくことだということも重要です。事実中井たちは土曜日という集団をつくり活動を始めますが、「アカ」ということで間もなく治安維持法によりその活動は停止しました。

　正しさが社会に直結する回路は既になく、言葉が無効になるなかで、言葉を再開しようとした試みは、問答無用で鎮圧される。繰り返しますがそれは他方でラインに守られた饒舌な言葉の世界でもあるでしょう。またそれは、私の今の状況への時代感覚でもあります。そしてそれは、尋問ということから言葉を始めようとすることのある種のためらいとも関係します。ラインを越えること、というよりラインが引き直されることよる問答無用の暴力への身構えとでもいうべきためらいです。

ファノンがいうように世界は「二つにたちきられた世界」なのです。それは敵対性とでもいうべき問題であり、やはり暴力の問題です。この暴力への怖れは、類的同一性からの離脱ではなく他者への恐怖としても登場するでしょう。それはジジェックが「恐れ（fear）と恐怖（terror）とのあいだの選択」とよぶものだ。あるいは李珍景さんが「共感的反感」と「反感的共感」と呼ぶものでもあるでしょう。

また問答無用で排除される者たちが類的同一性として敵対的な対峙関係を生み出すことも容易に想像できます。存在が存在者としてたちあがるという訳です。もちろんこの二つは同じではありません。と同時に、類的同一性にたち切られた世界は、ここで検討している審議性とも異なります。ですが、敵対性がだめだということをここでいおうとしているのではありません。重要なのは「たち切られた」世界の中で、まだ見ぬ他者に出会う可能性を確保しつづけること。審議性は確かのその可能性を確保しようとしています。問題はその審議性をいかにたち切られた世界に差し挟んでいくのかということだと思います。

ここに中井が言及している代表性が問題になります。類的な同一性を代表するという問題です。しかし中井自身は、この代表性については、別に論じると述べるにとどまりその後は書かれていません。言及された部分を深読みすれば、代表を審議性の中でたえず構成していくことを考えようとしているようにも思えます。この審議性により構成され続ける代表性は、対峙においては、二枚舌あるいは日和見主義とよばれることかもしれません。また饒舌な言葉からは、代表性を持ちこむことは対峙を持ちこむ暴力主義者と呼ばれることなのかもしれません。しかしたち切られた社会における離脱の可能性とは、そこにあるのではないかと思っています。

私たちがこれから議論しようとしている動詞的思考は、存在者においてつくられ、暴力において立ち切られた世界に、この審議性をはさみこんでいくことなのかもしれません。そしてそれは名詞的な存在者を意味する代表性を、捨て去るというよりも、それを構成的なプロセスに置き続けることであり、ここにおいて別の世界の可能性は確保されるのではないでしょうか。そしてこの審議性とともに構成的な代表性を生み出し続けるいとなみが、共に考えるということではないでしょうか。そしてそれは、今この場所において、既に始まっていることではないでしょうか。楽しみです！